三重県立看護大学紀要，3,129～134．1999.

育児書に記載されたおむつに関する内容の検討

A Study on Babies' Diapers in a Book on a Childcare

二村　良子*1　　臼井　徳子*2　　橋爪　永子*2
上本野唱子*2　　川出富貴子*2

【キイワード】おむつ，育児書，育児情報，保健指導

I　はじめに

わが国の紙おむつの転換率は，昭和62（1987）年に乳幼児用で25％であったのが，平成6年には欧米並みの約80％に達している[1]．しかし，紙おむつ使用による大量のゴミが地球規模的な環境問題として取り上げられている現在，布おむつの使用も見直されている．しかし，病院の新生児室では紙おむつを使用している施設が多く，また退院時，紙おむつの資料が配布されている現状がある．こうしたことから，入院中の体験や情報が，母親のおむつの選択に，重要な要素になっているという指摘もある[2]．医療従事者には母親が的確におむつを選択できるための有効な情報提供が求められる．育児情報源の一つである育児書には，このおむつに関してどのように記載されているかを比較検討し，今後の母親への保健指導に資することを目的とする．

II　方　法

育児書のうち，0～6歳児までを対象とした内容で，発行所の異なる育児書6冊（表1参照）を選択した．これら6冊は，現在書店で販売されている育児書のうち，最も新しい物である．

表1　使用した育児書一覧

項目　書名	A 最新育児百科	B はじめての育児百科	C 初めての育児 0～3歳	D 見てわかる0～12カ月 赤ちゃん育児Book	E わくわく育児ハンドブック	F のびのび赤ちゃん百科
著者・監修者	薗部　友良 監修	高橋悦二郎 監修	鈴木　洋 鈴木みゆき 監修	阿部　知子 監修	高橋悦二郎 監修	柳沢　正義 監修
発行所	主婦と生活社	池田書店	西東社	成美堂出版	講談社	主婦の友社
発行年・月	1998.1.(第2刷)	1998.5.	1998.9.	1998.9.	1998.8.(第10刷)	1998.4.
サイズ(mm)	190×212	257×183	257×183	257×210	218×151	213×190
総ページ数（索引は除く）	547	209	227	168	430	588
対象年齢（歳）	0～5	0～5	0～3	0～1	0～3	0～6
執筆者(数)	21名(内医師17名 助産婦等4名)	監修者1名(医師)，協力者1名(医師)，他不明	監修者2名(内医師1名) 執筆協力者3名	監修者1名(医師) 他不明	10名(内医師5名，保健婦等5名)	10名(内医師34名，管理栄養士等2名)
写真の割合(％)	3.6	1.9	3.0	22.2	14.7	2.6
イラストの割合(％)	13.6	19.8	25.0	23.8	2.4	11.6
おむつに関する内容 ページ数	2.0	2.4	5.0	5.0	7.1	6.8
おむつに関する内容 割合(％)	0.4	1.2	2.2	3.0	1.6	1.2

*1 Ryoko NIMURA ：三重県立看護短期大学
*2 Noriko USUI，Eiko HASHIZUME，Shoko KAMIMOTONO，Fukiko KAWADE：三重県立看護大学

おむつの選択，使用に際して必要と思われる「布おむつの長所」，「布おむつの短所」，「紙おむつの長所」，「紙おむつの短所」，「布おむつの材質」，「布おむつの形・種類」，「布おむつの必要枚数」，「布おむつの縫い方」，「布おむつのたたみ方」，「おむつカバーの材質」，「おむつカバーの必要枚数」，「使用前の準備について」，「布おむつのあて方」，「紙おむつのあて方」，「おしりの拭き方」，「布おむつの処理方法（洗濯方法）」，「おむつカバーの洗濯方法」，「紙おむつの種類」，「紙おむつの構造」，「紙おむつの処理方法」，「外出時の紙おむつ」の21項目を検討項目とした．これらの項目について各育児書がどのような内容であるかを比較検討した．また，おむつの項目に関しての記載内容が育児書全体に占める割合を比較するにあたって，育児書のサイズが発行所により異なることから，面積を算出してそれを比較した．同様に，それぞれの育児書で写真およびイラストの育児書全体に占める割合を算出した．

III 結　果

使用した育児書の一覧を表1に示した．育児書の主な内容は，月齢別の子どもの発育，発達，沐浴，授乳，おむつ交換などの育児技術について，離乳食，子どもの主な病気，けがとその対処方法，子どもへの接し方などであった．読みやすいように写真や，イラストを使用してさまざまな工夫がされていた．育児書全体に占める写真の割合は1.9%～22.2%であった．イラストの育児書に占める割合は2.4%～25.0%であった．おむつに関しての記載内容は全体で平均1.6%であった．

おむつに関する記載内容比較の一覧を表2に示した．布おむつの長所・短所をはっきりと区別して記載してあったのはDのみであった．Fについては長所・短所と分類しているわけではないが，両方の内容が記載されていた．Cは長所のみ記載されている．A，B，Eについては布おむつの長所・短所のいずれも記載がみられない．

紙おむつに関して長所・短所の記載は，同様にDが長所・短所を明確に区別して記載している．Fは長所・短所の明確な区分はないが，両方の内容について記載されている．紙おむつの短所として「経済的負担が大きい」，「ぬれたのがわかりにくい」というような個人的な問題だけでなく，資源問題，および廃棄問題というように社会的な問題として取り上げているのはF，Dであった．B，Eは布おむつの記載はほとんどみられなかったが，紙おむつの記載内容が多かった．

「布おむつの材質」については，Aのみ記載がなかったが，それ以外は「吸水性，通気性にすぐれた木綿が最適で，昔ながらのさらしは安くて丈夫なのが特長．最近では吸水性が高く，肌ざわりのやわらかいドビー織りや，ガーゼやソフトニットのものがある（D）」というように，数種類の材質を示している．また，柄物より白無地がよいとしているのはBだけであった．しかし，Bは「染料が落ちて，布がやわらかくなった古いゆかたやさらしで作る」というように，現在の生活状況にそぐわない内容もみられた．

「おむつの形・種類」については，Aは布おむつのたたみ方で輪型の長方形タイプ，正方形タイプに分けて記述があるが，おむつの形として紹介した部分はみ

表2　おむつに関する記載内容の比較

項　目	A	B	C	D	E	F
布おむつの長所	×	×	○	○	×	○
布おむつの短所	×	×	×	○	×	△
紙おむつの長所	×	○	○	○	○	△
紙おむつの短所	×	×	×	○	×	△
布おむつの材質	×	○	○	○	○	○
布おむつの形・種類	△	○	○	○	○	×
布おむつの必要枚数	×	○	○	○	○	○
布おむつの縫い方	×	○	×	×	○	×
布おむつのたたみ方	○	○	○	○	×	○
おむつカバーの材質	×	○	○	○	○	○
おむつカバーの必要枚数	○	○	○	×	○	○
使用前の準備について	×	○	○	×	△	×
布おむつのあて方	○	△	○	○	○	○
紙おむつのあて方	△	×	×	○	○	○
おしりの拭き方	○	○	○	○	×	○
布おむつの処理方法	○	○	○	○	○	○
おむつカバーの洗濯方法	×	○	○	×	×	×
紙おむつの種類	○	△	○	○	○	×
紙おむつの構造	×	×	×	×	○	○
紙おむつの処理方法	○	△	○	○	△	△
外出時の紙おむつ	×	×	△	○	×	○

○：記載あり　×：記載なし　△：記載はあるがやや不十分

あたらない．同様に，B，Fもおむつの形・種類としての記述はみられない．それ以外は，輪型おむつ，または長方形おむつ，正方形おむつ，成形おむつの３種類について，洗濯時の乾きやすさや，干し場所の必要性，たたむ時の手間などと合わせて記述されていた．

布おむつの必要枚数については，Aのみ記載がなかったが，それ以外はそれぞれ枚数の記載があった．しかし，Bは「最低で30～40組」，Cは「２枚１組で使用するので50～60枚くらい必要．紙おむつと併用するならもっと少なくてもよい」となっている．Dについては，「布だけで育てるならば」とただし書きがついていて，「さらしで50～60枚，ドビー織りで40～50枚，正方形のおむつは１枚で使い，30～40枚と少なくてすむ」という書き方がされていた．Eは「30～35組くらい用意」，Fは「30～50組」とある．このように，育児書によっては，おむつの枚数で表示してあったり，組数で表示してあったり，さらに，材質により異なる表示であったりした．

布おむつのたたみ方についてはE以外はすべてたたみ方を図で示してあり，子どもの成長に合わせてたたみ方を変えて工夫できることが記述されていた．Bについては布おむつのたたみ方で出生後「３ヵ月ごろまで」と「３ヵ月以降」と分けて書いてあり，たたみ方も異なっている．特に，「３ヵ月以降」は「赤ちゃんの動きも活発になり，おしっこの量もふえる.」ということから，長方形のおむつを１枚は三角形に折り，もう１枚のおむつを縦に２つ折りにして２枚を重ねて使うとしている．また，正方形のおむつを使用する場合，まず２つ折りにして三角形にして当て，腹部を締めつけないようにして安全ピンで止めるとしている．おむつのあて方を月齢により変えるという内容はみられない．

おむつカバーの材質は，Aのみ記載がなかったが，B，D，E，Fはウール製のおむつカバーを奨めていて，その特長として「通気性がよい」，「むれにくい」という点をあげているのは共通していた．Bは出生後1ヵ月までは尿量が少ないので，ウール100％でももれない」としながらも，「夜間用や外出用には，もれにくい素材を用意しておくと安心」との記載がある．Cは，「おむつカバーについて素材はウールや綿，合繊に加え，バイオ素材やゴアテックスなどの新素材のものなど多種多様」と材質の紹介のみであった．Dはウールのおむつカバーは通気性が一番だとしながらも，「値段が高く，手洗いが必要」とウール素材の難点も示していた．

おむつカバーの必要枚数はDのみ記載がなかった．他は，「３～４枚」または「３～５枚」とほぼ同様の内容であった．

おむつおよびおむつカバーについて使用する前にしておく準備について，Bは「おむつは，使い始める前に洗わないと赤ちゃんの肌がかぶれる．熱湯につけて煮沸して，おむつ地についた蛍光剤や糊をすっかり落としてから使い始める」とあるが，おむつカバーについて記載はない．Cはおむつ，おむつカバーともに「使用前にぬるま湯で洗っておく」との記述があった．Eは「新しいおむつは，糊が残っていると新生児期の赤ちゃんの肌にはかたすぎることがあるので，よく洗って，糊をとっておく.」と理由も明示してある．ただし，おむつカバーについての記載はなかった．

「おむつのあて方」は，D，E，Fの内容はほぼ同じであり，布おむつ，紙おむつともに記載があった．また，これらは，図や写真であて方を示していた．Aは布おむつについてはあて方を図示してあるが，紙おむつについては，「あて方は紙おむつの袋の裏に書いてある説明に従って.」と書いてあった．B，Cについては布おむつのあて方の記述はみられるが，紙おむつのあて方については記載がなかった．また，他の５冊にみられる，おむつをおしりの下に入れる時に，「おしりの下に手を入れて持ち上げ,」という説明が入っていなかった．

「布おむつの処理方法」については，汚れたおむつを入れるバケツを２個用意し，大・小便により分けるというのが，A，B，C，Eであり，D，Fは１個であった．

「おむつカバーの洗濯方法」として記載があったのはB，Cであり，「おむつなどのようにつけおきせずに，洗濯機で洗うだけの方が，透湿加工や撥水加工などの特殊加工を損なわない」とし，「マジックテープを止めて裏返し，ネットに入れて洗うと長持ちする（C）」であり，Bは「ウール製品はぬるま湯で手洗いを．マジックテープがついているときはごみなどがつかないようにテープどうしをつけあわせたままで洗う．ゴム類を使ったものは陰干しに」とていねいな内容であった．

紙おむつの種類はおむつカバーを使うタイプと使わないタイプ，また，子どものおしりにあててテープで止めるパンツタイプ，また歩き始めた子ども用にパンツ型のはかせるタイプ，そしてサイズは新生児用，S，M，L，LLのサイズ別，夜用の厚手タイプ，トイレトレーニング用の紙製のパンツがあるということが記載されている（A，C，D，E）．Bは紙おむつの使い方の中で，含水量の多い夜間用があるという記述程度で種類として現在の市販されている紙おむつの状況を示しているとはいえない．Fは紙おむつに関しての記載内容が多い育児書であるが，紙おむつの種類については触れられていない．また，紙おむつの構造について記載があったのは，E，Fであった．

おしりの拭き方で，Fはおしり拭きは市販のウェットティッシュを使うという記述内容であるが，Dは市販のおしり拭きは外出時に使うとしてあった．

紙おむつの処理方法は，A，C，Dはほぼ同じ内容であり，「うんちをトイレに流してから，おなかの方にあてる部分から紙おむつを巻いて小さくまとめ，ウェストテープで止める．ビニール袋に入れるか，新聞紙に包んで捨てる．ごみの分別の仕方は各自治体で決められた通りにするように」との記述内容であった．Bについてはおむつについた便をトイレに流してからという指示はなく，トイレに捨てると排水パイプがつまるという記述であった．「使用後の紙おむつは必ず，ビニール袋にまとめて入れて」とあるが，他の育児書のように個別に袋に入れるという表現ではない．また，ごみの処理方法を確認する注意もなかった．E，Fについては固形分をトイレに流すとか，小さくまとめる，自治体によりごみの処理方法が異なるということについては書いてあったが，小さくまとめたおむつをビニール袋にいれて処理するという記載はなかった．

外出時の紙おむつの処理については，A，B，Eに記載がなかった．Cは「先輩ママのアドバイス」という部分に体験談として外出時の処理法について書いてあり，「小さくたたんでビニール袋に入れ，捨てる場所があれば捨てさせてもらい，そうでなければ持ち帰る」という内容だった．D，Fは外出時の紙おむつの取り扱いとして取り上げているが，Dは「ビニール袋に入れて決まった場所に捨てる．捨てる場所のない時は持ち帰る」であり，Fは「外出先では，汚れたおむつは持ち帰るのがマナー．」であった．

布おむつの縫い方として記載されていたのは，B，Eであった．

Ⅳ 考　察

情報源により内容が食い違っていたり，子どもの実態に当てはまらない場合など戸惑ったり，困ったりした経験があったかどうかについては54.3%に「戸惑い経験」が報告されている[3]．

母親の最も多く利用した育児情報源は「友人・隣人の話」，「自分の母」「小児科医」と「人」が重要な役割を担っており，これに続いて「育児書」「育児雑誌」であり，みずから納得するまで更に情報を集めるものは少なく，決定権を他者に委ねる[3]ということがうかがえる．また，本来母親向けに書かれた育児書や育児雑誌が，専門職種の情報源となっていることも報告されている[4]ことなどからも，育児書の比較検討の必要性を感じた．

今回調査した育児書6冊のおむつに関する内容だけでも記載内容には，ばらつきや不適当と思われるものが明らかになった．たとえば，布おむつの必要枚数などは迷うところであるが，おむつの枚数表示のものと組数表示の2つの表示方法がある．実際には子どもの排泄量や洗濯回数，季節により洗濯物の乾燥状況が異なるので一概に何枚とは言えないところであるが，輪型のおむつはたたみ方により2枚1組として使うとは限らないし，輪型のおむつだけでなく，成形おむつを使うことも考えられる．したがって，組数表示より枚数表示の方が適当と考える．また，おむつを止めるのに安全ピンを使用するという記載内容がみられ，安全面からも不適当な内容であり，改善すべき点である．

現在，股関節脱臼予防のため股おむつ使用が一般的であるが，三角おむつの使用を紹介しているのは，現状に合わない内容であると言える．股おむつに関しては，どの時期においても股おむつであるとする内容と，子どもの成長により排泄量が多くなったり，股関節脱臼の心配がない時期になれば三角おむつの使用も構わないとするものと記載内容にばらつきがあるのは，今後検討されるべきことと考える．

布・紙おむつの長所・短所については，どの育児書もほぼ同じような内容であった．しかし，長所・短所とはっきりと区別して書いてあるのが少なく，長所だ

け，または布おむつ，紙おむつのいずれかの長所だけというものや長所・短所についてまったく記載されていないものさえあった．おむつの使用状況のアンケート調査[2]によると，布おむつが８％，紙おむつだけが18％，併用が74％であったという結果もある．そして，そのうち紙おむつを使う理由として多かったのは，①長時間使用して便利，②洗う手間が省ける，③もれないから安心，④替えるヒマがない，となっており，これらは母親の便利さで選択しているのが目立つ．それに比べ，紙おむつを使用しない理由としては，①お金がかかる，②おむつ離れが遅れる，③安全性に不安，④家族に止められたなど，赤ちゃんの側からの理由がほとんどとなっている[2]．また，ごみ処理の状況は一人一日当たりの排出量は県内において昭和61年が812（g／日・人）であったのが，平成８年には948（g／日・人）と多くなっている[5]．ゴミの問題は乳幼児の紙おむつだけが影響しているとはいえないが，紙おむつの使用状況や，これらの結果もふまえて，おむつ使用に関しては，長所だけでなく，短所の両方を記載し，さらに，個人的な問題だけでなく，資源問題，および廃棄問題というように社会的な問題として取り上げ，おむつの選択を考えることも今後必要である．小室ら[6]は，保育園児の母親の育児用品に関する意識と行動において，対象者は高学歴の母親達であるにも関わらず，紙おむつを燃えるごみとして意識しているものは62.5％あったが，おしり拭きに関しても，使用しない理由の中にごみを意識したものはなく，地球規模で環境面を配慮して育児用品を選択しようする者が少なかったと述べている．本調査においても，おしり拭きに関して多くの育児書が脱脂綿やガーゼを温湯に浸して，排便後の子どもの殿部清拭をすすめているが，中には市販のおしり拭きの使用をすすめているものもある．実際に紙おむつを使用している母親に使用している紙おむつの選択理由を尋ねると，「病院で使っていたから」とか「パンフレットを参考に」，「テレビの宣伝を見て」というものであったり，育児経験の乏しさを補う育児用品の便利さのみが選択の基準になり，広い視野から情報を適切に選択したり，判断する材料はあまり与えられていない[6]ということからも，適切な情報提供が必要となる．

現在，紙おむつの使用において問題となるのは紙おむつの後処理である．紙おむつは焼却することが生活実態として合理的であり，かつ衛生的であるという判断から，可燃ごみとして取扱うことになっている．したがって，「使用した紙おむつに付着した大便は，必ず取り除いてトイレに始末してください．残りは不衛生にならないように処理してください．」という表示がパッケージにされている[1]．また，外出先では無造作に捨てないという注意があるが，実際には紙おむつに付着した大便を取り除いていなかったり，公共の場において紙おむつがそのまま捨ててある光景を目にすることがある．紙おむつの後処理についてはすべての育児書において記載されているが，外出時の紙おむつの処理方法に関して記載されているものが少なかったり，使用した紙おむつは必ず持ち帰るように記載されているものから，捨て方をきちんと行えばよいとする内容とがみられる．紙おむつの処理方法については，最初の使用の段階から母親には適切な方法を指導することが必要であると考える．その時期としては母親教室等での出産前教育や出産後新生児室での実際の使用に際しての指導内容に取り入れることが重要である．

間違った情報があるなどマスメディア情報の内容に問題があることが指摘され，情報の厳選の必要性がいわれ，その方法として学術団体などによる公的な制度があげられている．また，必要な情報が必要とされている人に届けられているか疑問という意見もあり，マスメディア情報の活用は受け手の選択にゆだねて「賢い選択を」と言っているだけの段階から，新しい方向性を見出す段階にきていると言われている[7]．

これまでの育児相談，情報に関する研究は情報そのものが常に正しいという前提のもとにその受け手である母親の理解，量とそれが実際の問題に適合しているか，という点に重点がおかれてきた．

母親に提供される育児情報には，ある程度のばらつきがあり，専門職種により一定の傾向がみられた．また，情報提供者の育児経験によって，提供される情報に差があることも認められている[4]．そのことから，育児情報に関しての質の保証（クオリティアシュアランス）の手法を取り入れることは有用であると言われている[4,8]．

育児情報提供にあたっては，育児情報の送り手としての医療従事者自身がお互いに情報内容を確認し合い，情報に差が認められないようにする努力が求められる．

今回のように育児書を数冊同じ項目についてどのよ

うな記載内容であるかを比較検討することは，情報源としての内容が適切かどうかを判断する上で重要な方法の一つであることがわかった．

今後，情報として不適切と思われる内容がみられた項目や，育児書に記載されていても実際にはその内容が行われていないと考えられる項目についての実態を把握する必要がある．さらに，どのような内容をいつの時期に母親に指導するべきかを考えながら，医療従事者自身の理解の程度についても検討することの必要性が示唆された．

V 結　論

1998年に発行された育児書6冊について，特に，おむつの内容について以下の項目について比較検討を行った．

「布おむつの長所」「布おむつの短所」「紙おむつの長所」「紙おむつの短所」「布おむつの材質」「布おむつの形・種類」「布おむつの必要枚数」「布おむつの縫い方」「布おむつのたたみ方」「おむつカバーの材質」「おむつカバーの必要枚数」「使用前の準備について」「布おむつのあて方」「紙おむつのあて方」「おしりの拭き方」「布おむつの処理方法」「おむつカバーの洗濯方法」「紙おむつの種類」「紙おむつの構造」「紙おむつの処理方法」「外出時の紙おむつ」についての21項目である．

記載内容については，不適切と思われる内容や現在の状況に合わない内容などがみられ，育児書についての内容は育児情報源の一つであることから厳選する必要がある．

育児書の記載内容を比較検討することは，情報源の内容の妥当性を検討する上で有効な方法であるといえる．

情報提供者である医療従事者自身の育児情報の理解程度を知ることは，情報の質の確保という点で重要である．

文　献

1）日本衛生材料工業連合会：紙おむつのQ＆A，P．2－3，東京，1995.

2）柳沢尚代：おむつを通して子育てを考える—おむつ選びの諸条件—，周産期医学，23（1），35－40，1993.

3）斎藤幸子，他：育児情報に関する研究（第1報）母親の情報収集に関する現状調査，日本総合愛育研究所紀要　第26集，117－124，1990.

4）榊原洋一：育児情報の質の検討，小児保健研究，54（3），343－351，1995.

5）三重県環境安全部廃棄物対策課：一般廃棄物処理事業のまとめ（平成8年度），P.12，三重，1998.

6）小室佳文，他：保育園児の母親の育児用品に関する意識と行動—おむつを中心に—，保健の科学，39（3），209－213，1997.

7）斎藤幸子，他：育児情報に関する研究（第2報）—小児保健関係者の育児情報に関する意見調査—，日本総合愛育研究所紀要　第27集，99－106，1991.

8）加藤満子，他：育児書の記載内容の比較検討—クオリティアシュアランスの観点から—，チャイルドヘルス，1（1），43－48，1998.